学校教育学情報

「第3回東アジア教師教育研究国際大会」の参加記録
—「小中一貫教育」からみた東アジアの教育事情—

根　津　朋　実※
田　中　統　治※※

2012年12月5日から8日，華東師範大学（上海市，中華人民共和国）を主会場として，「第3回東アジア教師教育研究国際大会」（The 3rd East Asian International Conference on Teacher Education Research）が開かれた。同大会は，中国高等教育学会師範教育分会の年会を兼ねた。主催は中国高等教育学会師範教育分会，共催は日本教師教育学会および香港教育学院だった。「アジア比較に基づく基礎教育課程の「一貫制」に関する理論的・実践的研究」（科学研究費補助金 基盤研究(B)課題番号24330214，研究代表者：田中統治）の一環として，小中一貫教育に関する研究情報を収集するため，我々は同大会に参加した。

この国際大会（第1回は国際シンポジウム）は2年に1回開かれており，これまで法政大学（2008），および香港教育学院（2010）で，それぞれ開催されてきた。今回大会のテーマは「教師の資質向上とプロフェッショナル・スタンダード—国際的な動向から」であり，さらにサブテーマとして，“Teacher Education Curriculum and Standards”, “Teacher's Professional Development and Standards System”, “Teacher Qualification System”, “Training of High-Quality Teachers”, そして “ICT and Teachers' Professional Development”, “Subject Teaching Innovation” が，それぞれ設けられた。

同大会への発表や参加は，日本教師教育学会の会員以外でも可能だった。閉会式の主催者発表によれば，16カ国から約250人（うち約110人は中国以外）が参加した。発表要旨を収めたパンフレット（Conference Booklet，全63ページ，英文）によれば，20部会で72件の発表，3件のKey Note Speech，シンポジウム，学校見学（参加任意），そして文化見学（参加任意）が企画された。公式言語は英語

※筑波大学人間系（教育学域）准教授
※※筑波大学人間系（教育学域）教授

で，発表時は英語・日本語・中国語が使用可能とされた。シンポジウム等では，希望者に同時通訳装置が貸与された。

各部会では，１件の発表に20分間（質疑を含む）が割り当てられた。すべての発表を目にしたわけではないが，資料を配布しない場合もあった。発表に際し，パソコンによるプレゼンテーションソフトが頻用された。使用言語の多様さや複雑さもあってか，各部会に司会は置かれなかった。ただ，ボランティアと思しき通訳者兼タイムキーパーは配置されており，発表によっては逐次通訳が行われる場合もあった。日本の教員免許状更新制や教員採用の動向を扱った発表には，フロアから質問が相次ぎ，関心の高さを伺えた。

教師教育を主題に冠する国際大会だったが，我々の研究課題「アジア比較に基づく基礎教育課程の「一貫制」」からみても，興味深く示唆に富む内容が散見された。その１つは，グローバル化の中，教員養成改革の「標準化」(standardization) が強まる傾向だった。その象徴は中国の「教師教育スタンダード」(2011年) だろう。ただ，論議の中心は中等教育段階に置かれ，初等中等教育間の区別はさほど意識されていないように感じられた。もう１つは，学校に基礎を置くカリキュラム開発（school-based curriculum development, SBCD）といった「分権化」に関わる論議も，部分的に扱われたことだった。現時点で日本の「小中一貫教育」は法制化されておらず，実施は設置者の判断に委ねられる。日本の「小中一貫教育」は，教員免許や採用制度による一定の「標準化」を前提としつつ，設置者判断に委ねるという「分権化」の様相も，あわせ持っているかもしれない。

学校見学は，小中別の申し込みが事前に行われ，結果的に３校の見学先が準備された。我々は二手に分かれ，小学校（打虎山路第一小学，Da Hu Shan Road No. 1 Primary School），および中等学校（同済大学第二附属中学，No. 2 Secondary School Affiliated Tongji University）を見学した。見学時間帯は午後2時頃に設定され，校舎の案内と担当者による学校紹介が中心で，児童生徒が授業を受ける姿は見られなかった。小学校のホームページによれば，33学級に児童1000人以上，教員106人が在籍する。訪問時の説明では，教員と職員との合計は200名程度とのことだった。同校の学力試験の結果は，上海市内の上位10番に入る水準とのことで，華東師範大学や他大学との交流状況の説明も目立った。

主会場となった華東師範大学は，本学の協定校でもある。教員には，本学への留学経験者も存在する。我々が訪れたキャンパスは，大都会上海の中心部近くか

らやや西に位置し，敷地の広さ，建物の高さに加え，留学生の多彩さが印象的だった。滞在中に，華東師範大学「国際教育楼」の「筑波大学上海教育研究センター」(2012年６月１日開設）を訪れ，職員の王太芳氏（前本学北京事務所所属）と懇談する機会を得た。今後の発展が期待される。

今回の上海行きには，通訳兼ガイドとして，野澤有希氏（学校教育学専攻院生），および吴旻氏（ウ・ミン，教育学専攻院生）が同道した。諸事情により，当初の予定を多少短縮して実施された国際大会だったが，両人の尽力もあり，すべて順調だった。記して感謝の意を表したい。

(2012.12.19)